

25

20

15

10

5



保3  
2704  
1-2

月刊所藏

十二

青標紙書目

武家諸法度附勤向申合令條

屋敷向法例附兩番所略圖

武器及行列具的例

衣服制度的例附裝束着用略圖

御成先諸的例

時刻取方的例

御闕所通行的例

江都恩迺屋藏版

狠不許出冊

# 武家青標紙完

文冊禁商領限三百部

江都

恩迺屋藏版

狠不許出冊

九例

武家諸法度附勤向申合令條

屋敷向法例附兩番所略圖

武器及行列具的例

衣服制度的例附裝束着用略圖

御成先諸的例

時刻取方的例

御闕所通行的例

江都恩迺屋藏版

狠不許出冊



武家諸法度附勤向申合令條

禁商領限三百部

江都

恩迺屋藏版

狠不許出冊

一 おはり再び御萬人所をもとへる越後守是代の小傳が於

てございおちくひきよおき一式の御内命を於御人名れ舍して候  
事名へ一式の御内命を於御人名れ舍して候

一 聞常一式の御内命を於御人名れ舍して候

附記後判不白候

御内閣主事



支亂動空燒明月照  
山中番兵待深宵  
黑衣人手執刀劍上高城  
插木射弓押著船隻冒夜風  
四處方回旋  
提燈來移馬  
微微地以中止此小人禽

水銀

卷之三

詳數卦而詳以下而詳以上者皆考之  
是同不苟處小要得其毫髮也當存考方  
詳數而詳以之下以考

酒方末代 侯夢若 大符下後 龍女下後 腹痛  
小篆鑄之吸吸下後 烏天子出下後 級侯李清 金上乘

忽公集

不发 窝芳安役 岁无凶荒 疾疫不生  
评粟能七十坪以上者

中座發下座發下座發抱座發下座發下座  
十八日正書付 中座發下座發抱座發下座  
發下座發抱座發下座發抱座發下座  
發下座發抱座發下座發抱座發下座  
發下座發抱座發下座發抱座發下座

七百疋以上  
一千疋以上  
一千五百疋以上  
二千疋以上  
二千五百疋以上  
三千疋以上  
三千五百疋以上  
四千疋以上  
四千五百疋以上  
五千疋以上  
五千五百疋以上  
六千疋以上  
六千五百疋以上  
七千疋以上  
七千五百疋以上  
八千疋以上  
八千五百疋以上  
九千疋以上  
九千五百疋以上  
一万疋以上  
一万五百疋以上  
二万疋以上  
二万五百疋以上  
三万疋以上  
三万五百疋以上  
四万疋以上  
四万五百疋以上  
五万疋以上  
五万五百疋以上  
六万疋以上  
六万五百疋以上  
七万疋以上  
七万五百疋以上  
八万疋以上  
八万五百疋以上  
九万疋以上  
九万五百疋以上  
十万疋以上  
十万五百疋以上  
十一万疋以上  
十二万疋以上  
十三万疋以上  
十四万疋以上  
十五万疋以上  
十六万疋以上  
十七万疋以上  
十八万疋以上  
十九万疋以上  
二十万疋以上  
二十一万疋以上  
二十二万疋以上  
二十三万疋以上  
二十四万疋以上  
二十五万疋以上  
二十六万疋以上  
二十七万疋以上  
二十八万疋以上  
二十九万疋以上  
三十万疋以上  
三十一万疋以上  
三十二万疋以上  
三十三万疋以上  
三十四万疋以上  
三十五万疋以上  
三十六万疋以上  
三十七万疋以上  
三十八万疋以上  
三十九万疋以上  
四十万疋以上  
四十一万疋以上  
四十二万疋以上  
四十三万疋以上  
四十四万疋以上  
四十五万疋以上  
四十六万疋以上  
四十七万疋以上  
四十八万疋以上  
四十九万疋以上  
五十万疋以上  
五十一万疋以上  
五十二万疋以上  
五十三万疋以上  
五十四万疋以上  
五十五万疋以上  
五十六万疋以上  
五十七万疋以上  
五十八万疋以上  
五十九万疋以上  
六十万疋以上  
六十一万疋以上  
六十二万疋以上  
六十三万疋以上  
六十四万疋以上  
六十五万疋以上  
六十六万疋以上  
六十七万疋以上  
六十八万疋以上  
六十九万疋以上  
七十万疋以上  
七十一万疋以上  
七十二万疋以上  
七十三万疋以上  
七十四万疋以上  
七十五万疋以上  
七十六万疋以上  
七十七万疋以上  
七十八万疋以上  
七十九万疋以上  
八十万疋以上  
八十一万疋以上  
八十二万疋以上  
八十三万疋以上  
八十四万疋以上  
八十五万疋以上  
八十六万疋以上  
八十七万疋以上  
八十八万疋以上  
八十九万疋以上  
九十万疋以上  
九十一万疋以上  
九十二万疋以上  
九十三万疋以上  
九十四万疋以上  
九十五万疋以上  
九十六万疋以上  
九十七万疋以上  
九十八万疋以上  
九十九万疋以上  
一百万疋以上

別入へかう初う附別紙れ書徳宣書をあ書ちに詔  
後足向し准義は後批を追合何と准義書に持て  
うの御忠宣院何と准は後批を追合書を准義引  
候ひる双方名あう附は御原の御書も御准集  
行承とて應く事を御原の御書も御准集  
う人承又一年五月五日御原も仕本と上六法  
承放りの太原、御原の御書も御准集不別入書房  
をゆう

卷之三

秀忠氏を不善ひゆ。田原義は勿滿の代とて河内公  
武臣を攻め破り、率き邊境平定を爲せし者也。  
國を爲す事は越後守門無れ候事也ハ不善太極  
公と云ひ傳承後ハ不為事也。右と通じて御書傳  
ゆる者傍記引拂之矣。來年中工限終止。は良赤  
城也。馬鹿翁有不覺焉か。凡十ニ年以御書傳居  
久テ本其半世亦以御書傳也。近例

以上ル以居比傍ノ政事ノ外少少の事ニ家方セ方  
万キ亦万石以志下處中取扱人皆科係減法孕  
を由樂人様樂出月立所ノ又モ山用其該株海亦之分  
云術怪犯ニテ莫傷恭事儀拂南嘉宗多拂日蒙  
事方慈柔拂天時多拂鞠連ニテ拂拂岡其不和樂拂  
事浪人ニテ多拂方亦拂來多因多ニテ拂枝勿當ニテ  
事モ多取死拂レモお外山松ニ若モ多在又若但三  
少拂モキ育人限多立之居トガ若ハ不家。寺  
内ニ隠居他滋考トダニテ教學亦多柔度就  
後半多延被教是トミテ事少少拂其號事モ小  
事多少拂之也家一地固あが多兼就又年少も多  
事抱在安。事モタリ享和元年育座也政事

合抱比抱至安所至安町重慶寺上り、名前次官  
を絶ゆ知る所抱也。やひも御家臣が旅不ト博示  
雷子使不お仕と抱比ト當ヤハ。抱至安トナハ岡  
が作ホモ森ノ場不ト抱至安ホモ高ヤハ但抱至安シ内  
モ國久井家作行平洋吉原抱至安ホモ又只行  
博内無曲仰百坪吉原抱至安モ多シ。町至安  
ナハ多シ一多シ支死場不ト所至安ト當ヤハ。町至安  
ナハ多シヒト時代支死場不ト當ヤハヒト時代支  
死シ限不中私辱。社殿らも町至安支死ヒ支死ヒ  
町至安支死ヒ當ヤハ。實人遣付總額ホモトヨハ百疊  
秀三木翁仕外抱至安天正八年夏及方志多勢の事

と存る。爾山書萬万石以下。之を右以上より、立代  
吉今木立所て居所と陣所とお嘗可十人  
以降代友多を以陽所陣所と嘗取我妻  
みと存る。

嫡子下屋並一室。又。享和元年松平  
上総守家来より間合嫡子東洋因見不争と  
内上屋一き。住居は下屋。示義  
夙夜も時辰殊時一室。辽然へらゆ若一  
氣也。其事。お心のやうに。附焉と就へ  
夙夜も。之を時宜主一室。ひらも不妄候





石垣兩番所  
疊出八五万  
石以上也

作文

右亦亦之長廊之前深方名以下長廊二面木梁万石不长廊  
二面梁也但表门上亦有之故附之曰圓基矣帝避間柳  
間文岱等合杯限交代多令其奉十方衣笠一他如表曰友  
處所也不你也了如元也長廊二面梁也「表門斗  
幸勿斯似似

武器及行列具的例

御策於车甲未立於車塞政六安年正月十日松翠  
陸後ち東來ち少与一高盆同付向令御策於车甲未  
弟之插自今之車一極大安度中千以下者不系我  
金滿とやれ銀、滿とやれ田下に極、立也、無也、  
至るノ附御策於车甲未立於統令、滿貫十内  
御策足以上、一極安、自今之東方持東ノ弟三和  
用足若子少也必アシ、而之此又如、用ノ弟立也、  
改支死ド正降分セ何弊也利不若車ニシ  
御策於車未立、不おアシ、塞政入史年二月尾別  
寺城附ノ同伏允ト向食事在車甲未立於松翠

炮を以て之をもむかず。小の久後、終始これを失ひ、當に不  
支候。射撃を失ひ、遂に疾砲也。その門へかまひ、仍てお尋ねす  
仕事。焉を察ふ。密めに候。お改め。大同と候。也。是れ日  
付を以て、射撃をおこなひ。但百日、大同とす。又事を改め  
室事中改め。是れ五々  
終炮。正四方限とす。未改て子年12月井伊多於が捕不  
肖。射撃より卒。居在安下。不候。おまち。設地範も古。射出日向  
多候。と。限と。年。改め。小。附。終。炮。總。古。射。出。日。向。之。義  
没。之。未。改。之。射。出。日。向。不。候。不。候。小。射。出。日。向。不。候。不。候。不。候。  
百々を。モ。お。ゆ。う。モ。テ。候。事。不。候。

恒向右下に立て左心室で音より心尖の右心室下部に上り  
左心室不持と審正公の如きより附書面矣下持於  
候大旨儀以下も矣下持不苦手も御  
因云放るより放る也、之を素手れ小手筋孔難也  
又馬奥、柿子の木に倒れるからあ來捕られ又不  
辻處人捕れ在處也、お源が毛附木徳定と申置付ド  
居候も附木二口落葉も必ハハ達文九お波費金之  
の如又达文もつゝモレ日同和也安樂也松葉  
有之又うは安樂也但も安樂内事へ金辻アサセ  
れ若出走の私事也又トテシ  
於てモヤ俗法後々候付容易接もとハ不思禁事也  
附書面の方に立載レバ、又不ア柿と譲りの宣付一  
旨

あらひ後十数日後日又が御を深ち不鬼皮翁向令  
出面虎皮鞘をもてて放るてあゝと兩札みそ  
吉良をやうか犯別萩上赤伎ある志通川松山松小屋  
柳金松平右衛門四伎サト並早野子  
朱柄を赤湯井并大炊替作がく、四筋手すき木の盆  
益水源を右門朱柄毛板血降九升  
一本立木井伊内志田甲斐橘子二万石以上一本立木、  
志家松平信源ち田村太末を支給達犯煙細い鶴也  
細川半あむ北平劣化名前向す。盆を守る板金  
内候正

加藤禎吉 二浦主役  
酒井の向子が塗井捕尋より文政九年二月廿日奇等  
出因外元老酒井雅忠が身を棄て歿中止団は出付所出給  
給不異不異と號す故に此因外少く身を以て下すゆき河内を御  
塗井柄威高子と名付され給ひ太朱捕、威高子と謂  
也而未だも詔を左近侍に授けられしも即ち唐寧金枝院朱降高子  
の内ち持論を以て方正を志す年在州説教、今も今最能  
比祖治及高城の軍功也。江戸 東照宮様の御見於午  
正流朱柄と豊安柄貞牛正就雅忠助屏川仕右衛門若狭  
佐伯源之左衛門雅忠煥子酒井千乃舉為持山松浦守也  
酒井門主後もお塗井仕合義方山田出雲守、在山之宿

國と云はるゝの後、余の軍より柔軟の軍の時代が至り、武志竹  
の諭ことば等もその事、武雅記、多かうに上下の所長より宣旨  
に従ひ、まことに、わが軍の士氣も一層高まつて、更に元氣あ  
る所長の如きは、必ず其の軍の士氣も高まつて、國の威を發揮す  
べし。

用ひて駕籠等二名づけを車の用と古史考曰葉帝作車  
省冥の時加牛禹の時毎足仲駕とも極繁興當時役被  
打掲引内役猶代庶しほの製を各亦然ふよりあり櫻  
御代ニキ縷又極たりの小豆板にも復もノニニホ  
又ぬけるものに之をするが如ま一木事あとが若  
さの差引が多病にあもの後又つから筈前あそびにさうり  
いあくい大冬かて馬小糸きのおりに利家の大天正元禄  
のひあと客連出先のと家みせんもえこす所ひまきこと  
尚附れ力が坐上函井筋を行徳以上に猪子半分半升以上  
と並限よりと併き三尺八寸四釐半面に九寸二分  
毫唐突也坐上四十步不間板門を參詔焉と云ふ  
其處の御事也

嗚呼以日同了公不平世人也幸而我居以公于厅分外  
事事不以公。的例文政己年九月廿日付公在湯鷺天  
神下加發復勦賊緊追令过支昇場肉紫等侍者公  
素毛裸脊弓上是也誓也者放來居不處命身方上竟之  
出如付过更不以私委不以弟事家公又不如奪還蓋若  
以付與家事必有如更附年甲子年今予之辱不榮得  
立身于世矣豈不以公以下大嗚呼世人余安十月一日  
在虎山處死于付公也莫矣

幼年不遠砲を致し於吉宗の時十名即殺む。」  
東京を宮山に遍々上り城をと/or井砲術指南役  
終り焉室三十九葉あり

乃村以後才難多寡其風氣又か猶を以て不思議也。前回今附  
少面虎皮鞘も委てあて下りてゐる。とての御札もそ  
吉良氏をさへ亦犯別萩赤枝ある。通川松山松山城  
相会延年松か右田四佐あ<sup>朴</sup>松風也子  
朱柄を赤漆井戸井大吹松平作久、四番井口三清木の塗  
墨承源を左門朱柄毛切血降九舟  
一本足を井伊家が正田里斐萬字の二方石以上一軒をや  
え赤松平作久、田村太永安信達犯煙細い能者も  
細川半舟も北平秀作也。名前向す。対象を以て板倉  
内藤正  
一立牌云赤八紙赤度別仙毫。二方石不見三清木の塗  
墨山内赤漆井戸井大吹松平作久、朱柄毛切血降九舟  
鶴  
一酒井の因ち松陰井戸井大吹松平作久、文政九年、月廿日  
冒用外元を漏井駄朱以爲ち居。由城中より羅井井戸井出外  
也安不不覺、然後此因付に少貞付といひ下りてゆく。而國事  
論朱柄も廢過手も見却せぬ。おれは左朱柄、終付名前  
此席主もおもはれ左おれ候五、六時、もと妻室、今後子孫  
の内ち持給ら候ハ天正、五年在州泥坊で候。東照宮様は御  
地組合及御詔書、軍功也。御身、東照宮様は御前御  
仕事も左清雅。本以猪子酒内ち力舉為持。御内法也。  
御内法也。御内法也。御内法也。御内法也。御内法也。  
御内法也。御内法也。御内法也。御内法也。御内法也。

砲船持坐於船上役儀てお放。陽流砲打浦船は堅重  
に方安當兵場内に廢棄失浪二株枝同將人仕ひ老兵並廢兵  
浪立枝右主と見保元年以迄極 因々後砲初處  
天文十六八年と云一説又云治三年南寧人氏字志眞智と  
いふの流傳へ渡り月夜も行ちまつて是後則移名傳玉流り  
四年八月系船奉り又輝りと初る試上毛を御と傳の  
空手兵兵小令せ、生を沙必友村少佐康き喜れ御斧秀  
作考より而かの地とあるが如の安政十七年八月二百件毛蓮  
圓にて康人貢料へ渡り給て先出の他と傳ふ者少く之の毛  
蓮號を四月於此内に作付へと傳す  
素軍を東山城下小切る不來川信と高野車の車を除定所  
御手の車と云ひ唐の下の車の輦を除き上の車の輦と  
號爲之

因るに従ひて徳永の軍うち赤坂の軍の時代よりと云ふ事あら  
かがわに持する事、武則記、秀吉の上での所は、定見  
東邊の軍出の所列と云ふ事も、その事、赤坂の軍の所の事なり  
を守りて建武二年正月、并ち合戦の日を狭き陰がを  
出でて敵に突け三三のはじめの出で、赤坂の冬夜一所謂を達  
高天小達大内長達武則十文字達高天町取  
雅達小達大内長達武則十文字達高天町取 沟達沟達 代紀満  
達満 おうつ是のう孫長只秀の子の時代よりと達と  
更に一ま連とて武功をなしていふを達と及やと称し出  
ゆふ必を達と持する事と云ふ事なり

陪臣と申す者也。次第 天和乙巳年七月廿日 僧源を  
十歳余りとも紫袍の御服等も姿あらず。以て是が御殿  
を來下され所を源家與ひ難く。私共又以て御宿御起  
を介度院。了りて太極門下内へ不意に御内へ御進上  
を積て今すて紫袍着下。△陪臣等は専ら御賜金を供  
す。一赤老ハ萬葉兄弟。一赤老五十年下が終後免  
め一万石半。一赤老ハ御八十下も。赤老兄弟。一赤  
老。亦さえ十才で御免せん。赤老八十下より。月切  
て俸給を蒙れ。而して御免せん。人少御給酒。以て同姓宅  
を判元凡ひ。一赤老ちもが參詔。而て出因材宅を。霞  
兎乃のゆき。す。一代を歎き。而て御内へ御月

井坊源四郎の西ノ房持く序ニ源方甚也分家松平日向ち  
松平上秋郎不為持く清ニ郷方城も多美義摩化春犯  
凌安雲と「因幡津山松」に之誠明不遇と墨山津使治  
久保田登と源治淡國太連川今洋佐又別原  
源よりて為持く因云打刀の名首方せまこえま打抱頭  
長お赤次難左刀後前を隠太刀集下少ぞの長刀竹子指  
同柄七刀持傳高蒲郡長刀記著手の太刀持傳注卷  
長刀卷此がよきも子代跋雲に用ひるゆめのう  
信長と申す和為持いり因川城中ちか本ノ同合偏ほうち  
主ナサカア持い又先代持する若の君名主山府因を發  
この為持いりアリ不吉の件と謂ふ御座附持る事清  
其城は主が山城中供、兵城かたばるも山中わね持  
る者古記  
信長坐主あく前而御入山内府内あらと為持の條やを  
主ナサカア先持く也て後ゆ  
御長刀為持方ニテ 宽政元年八月源綱と儀  
之、内七刀為持い義清が一七三、安房刀二刀為持い大  
小も御考考と號列號、附女面嫁相く良供至内  
七刀のみ持て候ひ室も無く酒井人達の持て持て七刀為持  
る者古記  
主御に御経附七刀持出此を用ひテ 宽政戒事有  
向合万石以上妻妾子孫、御経附七刀持出此を用ひ  
セリ、内万石以上下妻妾子孫、御経附七刀持出此  
事主用ひ矣御主と申す事御主と申す事  
格調高きとテ 宽政二年屏列御経附ノ用合高間

和二年正月十日松平左九郎撰後政之言  
切駕を終てお角の面と生來案あききれ不宣ひるゆ  
御事と仰徳より元文ニ己年四月廿日出で材と板來ひの次  
おがく無地に孫き不すが板若用接あり不殘竹般と  
詔書の如ひてむかひ翁と考前板を一等りとれど也  
さう余程らまざりの板山ひとみ不  
おおは家接どうてふを 之方極みハ難き綱代也」と  
先に思ひ易持く様方安女被笠より絶え防て送奉方  
不全段先第内長草掛紙ハニモ革内全段先後差段  
亦まく、固六方の上刺袋とて綾懸毛織て空心と  
成綴てある。極端と極意を拂ひ易めと合せて持せらるりの  
のうと極其のれより接行とて行と別てを身を極み







一 洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司

洋服 繁縫 異國人 京都分年 二月廿七日 説教

三十百司 改新 代 金司 開元寺 日本 金司 廉 金司



大紋の乞たくはあまを角ひる今へ至定生れに及ばず  
ちへ歎て夫の酒と角ひるる爲財縄舟船文麻鹿ぬ麻  
玉算ねると用ひに見ても略候るども手綱う一枚と取  
たを車ふとすとへ彼の下の皮をもとを古事記より下傳

藝文を鑑賞する事は勿論であるが、其の點で  
文化を享受する事は必ず善徳を起す。脊骨と頭骨の間には、  
骨髄の内二大腺體すなれば人體の向隅を悉く知れども、  
且つもとより性子が弱いものと爲るべし。

附志夷毛利昌氏の後は、やうやくも因幡松本城へ  
奉納する。昌氏がむろぬ御守護を勤める御作の事又乘  
とち李吉と曰ふ。はまと菊川千賀。昌氏を洗あれ成る事  
はまの御木立。おも苦しき凶事に至りて松林へ下とも役元  
の不育の松ねど角々ナテ堅うれども、どう根白痴木鬼の若  
木は萬葉の事歟大絞止の延年を惜ひ下げられと申す  
矣。さる。李吉と申すも「めぐみをまく」と福子と申す  
ア佐多アキミヘアヤセハヨリタマノミシタレたゞ人體にて置ヒ文  
字もア種の体多アモトキナキアリ。アキ  
大絞止後西より。寛政壬寅年正月督太保其虎等上表  
しき姫侍乞。伊勢後西村山用良ち此れを互見候。是日  
大絞止附方修善也。采委正敏大内村山同舟ら嘉法賓く

布衣 古き織物抄に布衣と云ふ衣の事とはナシム  
乞之一傍抄に布衣と云ふ目あて古良や大椿の織  
と肩の筋引て地分るに布毛極も亦布衣といひ  
來歴中も先年と多く此の織は只今そら綿を身や  
りともせず不織り多く布を身にらゝゞ今度はゆふと  
布毛の以復へ不うかゝも精ぬとあり信良より此の絹  
又あら綿の内て身に文化年中對外『如解はる織物  
甚ううか利度始是アノ年の正月 神佐に布衣小  
内物セヘテの年もその羽ニキを用也  
金糸段 金糸ト金糸ヘト古永和毛壁き人の織物あつて

在處を據て又うもあつたまつて、とすれぬ御末と云ひ被  
と肩下へ不思議な紫の一体の忍子を曳おひ麻布古宮  
より萬物へと在る。絹麻の毛と角やきぬの毛を宝  
らで多くいはば美名をとてがとせむ。大形の模様と有  
て、上と下と勢りくるを又小紋もふと。絹綾柔きの外  
ぬに付する革を一皮をもてて縫の裾不絶とへば、そぞ歌にて食  
長と下。絹麻着物の事多き。而して絹麻着物の整  
用やくと置きよりて御中の様とすと文化八年二月  
廿四の太々絹麻の上下と角やきぬの内面沙汰みと  
絹麻不思議の又同年七月に於て御内と太々絹文と角ひ  
方をあわせし。又同年七月に於て御内と太々絹文と角ひ  
用ひねり。物をあるべ室と上方を織をあさす。

第十六條 通商手帳の登録の方法  
と有するものうち宝庫のほう返り手帳と有りて  
の様方ハ總の権利主按く七級と権利つと付せ  
てあらに引きうる今く切てが有り又括ふくアを  
合途申花ひの付へ括り上るアを云うる今く勝  
列ふ法を以て括つき他函すア又薄又薄者  
を總括すア又申花の主義ハ契約ノ内  
半下ト取扱い上トと云わヒ是利害の民本を施のう  
今の上トはあくまでも利代義滿の内地の金城貯  
候とを繰りとて申つ是すうと下の形始まるとそスも傍  
古代の墨極との有る温泉、温泉の名ふ供、まの因を元

卸成先著句列

清承清道筋切場、車寬政元年正月二十日生宿督支數  
清後清規式長帝裕德行所最清之勢安、達其平之役  
至死不妄持、清先也至處事更之連接少為若之多物也場  
而為就相固、也車中之亦勿持、也佐者也立切、场不張  
更余不妄假人、也多以之取之不外而、也有由相  
之清成先人固之是大切、并守而清、清成之志未深  
之通拂之清先出、也过焉而、也车之假人、也连立切場  
立出未固、也車

秀操遠濟成志義大も亦通所を即ひま時、在多義  
遠所にてくに御詔書の引ひを乞ひ食事等を、還所不獻  
先方をあせり者向むれりは私才を以て  
御座候笠内免車 享保十六年五月  
秀操大納言操、御城中、濟成を喜び贈以て伊豆守  
き食翁と社、御名作而後、前用才仕外但 紅葉山  
御未前、免車、唯今追々通するべく御在所御番を除く  
チカ「免」免も又半ぬどよる板岩を平仕才仕車  
所成を房侍用狀、嘉慶五年正月十日  
猶忘様約湯地、濟成より免車、快義約、系府參拜  
當事の旅遠山延々、御宴御差引、是一為、十一月十四日

行ひぬ。此は畫面書うる人間がほくを左を 通御幕  
水邊の處に宿人足を悉く用ひ候。其は仕事の爲

三河守忠と西觀音寺門脇不或法興寺門脇不武子  
子忠と伊勢守安藤信不<sup>▲</sup>東有弟も東に龜有持惠  
の守高徳不<sup>△</sup>西有持之  
水添 上義之始 正保四年六月九日閑田川筋  
侍處有之内至多々て歩高尾吊佐方水添初<sup>ト</sup>上義能  
高尾吊又及小笠掛。徳向勢古照<sup>ト</sup>義時正保五年七月廿日丙酉  
後市内席下挂ち坐る方左原 上義之十九日 乃向服  
を褐る。 享保五年七月廿六日山内傍ヒシ村持甲山元  
ありて路を高尾のあゆを 上義有時狼湯吹子草子  
勢を拂候尤祖<sup>ト</sup>肉を絶<sup>ト</sup>二八究五十七人之  
大延物 上義之始正保五年十一月十三日正子筋

行ふ事の式を  
京使より傳て居る御供物と云ふ今  
より上使の御供物の事と思ひ甲子の年常主方  
角間寺より上櫃を持て御供物を送大名御供奉の事  
御供物へ、ア翁主ヒ馬協へ 上使を仰うケテ云ふと  
乍らア翁主ヒ馬協へ 上使を仰うケテ云ふと  
多情子未は抱け薫染をも參同矣一本を持てるが  
房主をうる毛等を分て上を渡すと云々奈士麿も所持  
したを被り御供物は元度寺の外より已にておまえ定安  
がつ下りて射手上場より二人死ありて射て毛を射り上  
めの毛を射れり次に士馬代や次をあらへ 射候上  
と上場して毛を射候う是と云ひの如物と云 も好  
きをも參りをめまの刻をも後づ先づ隨子又二席をも入る御

貴子を假りて其の身を取れど其の面に也有る由相  
之拂成先人圖を大切に保有て後拂成る者無  
通拂之拂成出で过る事無く其の役入で拂立却  
其出未圖す事  
大抵万石以上と而くはす方通達  
還拂移入張圖不す事  
寛政四年

久留美は小笠原。後藤勢を攻め、元治元年七月八日二度  
後藤の陣下に落ち歩く方のみ隊。上流に十九日。而も兵服  
を脱ぐ。享保四年七月廿六日牛川橋にて村井田山にて  
身を落す。馬や槍の色漆を。上流有時假湯門子を殺す。  
楊々野佐丸組。肉を絶て入院五十七人。

父等遠所成兵而大兵示廻所而六軍皆在  
還所守之關過而引兵至食牛大軍還所不顧  
朱方守半宿向夜行軍才發之  
一  
御座而陪坐御免之車 享保十一年五月  
乞參大御言操御城中 所成兵而後以御陪坐  
乞食而起而坐而後用不仕但 紅葉山  
侍奉前房也惟今追之逋々々而此大有當書之而  
乞免之又也足平而止於極片苦辛伏才仕之車  
一  
御成長御用狀 諸官署五亥奉土月土  
大御言約場地而所成兵以宿次快樂而集府參  
高車之兵逐出營者之何其美而美是 一  
大御言約場筋而隔御行梯而坐而威也之表通

高麗文書稿 遣使高麗乞金銀之請 諸商內裏市鹽  
以公私也向求之不獲遂遣使以臣面望傳于上乞度牒  
府宇起居需軍器船馬萬步兵以長持每支  
步卒通一階或主兵馬侍用府事元至無去之舟若如  
何求人也外亦有之其後後車也肩之以外以為然至豐原  
登彼村以故安在所失人避之矣御用主事、所及國之  
流亡者道旁見多矣通以是役太祖方之以原長  
門迎而降見通發喪不以 帝遣勦捕之并通中使  
使求通以是役在外犯船賊七月 遣使之責其罪  
門 通使史獻使內使不以某通海道之南歸日光  
脚用寫次序狀策委之于身承札以次也松車內使也  
安道使通歲之春一類船稿合長服稿內使之通海道太

卷之三

御門內努松平戴率領御中衛、長弓手等不籍  
次商狀集朴頭內近侍奉事官吏多恐犯禁而被通  
在通坐上者不以財物通也。庚午正月一日  
御門署免刑大爺也因持上奏本在御門苑及文光第為  
重要人招請至西宮下聽候接投宿。○戊戌正月丙寅自  
禁水社要人破木而入同村之以林与多津濟用之矣  
有之矣。御門苑西處深山中蠶室今并忘矣。伏誠  
告。○壬辰正月丙寅在御門苑中移居於北門。丙寅夜有  
蜜柑子千百粒來通亦可。○壬辰正月丙寅要人破木而入同村  
腹便要個口處大爺傳指奉事官吏方與陵左通。戊寅日  
為。○癸卯正月丙寅還停在御門通御五殿不陵日光  
御用扇次商狀集朴頭奉事官吏方與陵左通。戊寅日

傳する所の武を 真鏡は備てと傳へ御保察官と今日本  
をすみ 上使の御席余處の事より思ひ申すに及る事半方  
南面坐上腰を拂て御座不居然大名御箭射の事  
豫か候り、乃而西と馬場へ上荒野をあらえテ土弓にて  
罕るに力出せと佑く是を以て先久亦良三十方弓を  
弓帽子赤抱羽鷹塗を參拜因矢立すも矢をさる大  
房毛手弓毛等を不分て上を決むと云者士麿毛は捨  
て毛撻なり木ノ板有日九駕馬の外より已て本毛起室  
放つ上毛と射毛上駒より二丈余ありて馳て毛と射毛上  
毛の毛射後れ次毛士駒代や次毛あるゆく射後れ上  
下より上駒から毛と射後れ毛を云ひて追物と云。御好  
宜文毛を効果の刻毛と云ひ得毛先毛騎射三石十支合御  
監

董内に朝霞用の使ひ外と考へて來て此を初見功臣  
食を供して居る。○熟白色の甚食味濃いがちの味で、肉と音頭の  
並揚前料は生ひの菊川屋外と名を有す。和料は太もせし不昔、  
厚味の裏生の料。前川屋等と稱す。次第より。放はる處を商  
東仕事の屋内に町中を回る。其處を暗分不及言ふ。  
聞ふるまこと外と考へて、外と名を冠す。仕事の多又は直接人を委  
官を別途立候。今老弱別役。一も二元然其方々源。亦有  
教主をして生じて名を不代本お仰す。少く太別業並代理文書  
考。切箇要を在る。多參事。但陽名を失却。而て老大を指揮  
老や食す。改判膳。若不老者。もひう。而て遂。事事。少  
○と國か。仍所不。多。而。之。改。事。改。膳。老。改。判

一享保二年三月廿日苗裔防齋 今春西村氏より御入  
御飯附持し更卒にててあり仕合せをよどむ。且  
傍々尔處有櫓門を以て改築し前省と同廢義弟下  
西も尔處改りのふる料亭付近又處裏中  
泰波役人也仍も拂衣山中、步道の隣に風寄にて也る  
何ともて居た度す御法名にして御事とて役人往来を  
取扱事と定め作業向後方舟にてとくとき老翁とあらま  
あら早生ひえ死に才子歌是見のアーヴィング才子の歌  
以て此日十月左を移しててお達

一享保五年四月廿日苗裔 〇去々年今ある年中春白鳥  
葉食店。晴秋上良景也仕事裏面を事はれ代賣物。自今  
其あらゆる者皆白鳥葉食店也。萬能堂と號すが都上井町高木丁

佐佐木又と號す。足音急或取或走す。其勢ひや骨  
車御者と走りもすりもすり仰上り手古通とよ相人脇也〇  
高木の裏今度鶴林院御者と斜行歩を氣す。年齢也  
あらぬ事る。才子歌とて可る。通用す。〇今春名。奈良  
形家高麗色摩毛屋を既も通す。筑前よりも多う  
出る。松高麗住江戸を召上す。但因よりも多う  
い。刺繡丸も既もか万井町方を呼む。近所方を遠ざけり  
一席替弓候 享保廿五年二月廿五日馬鹿改長因三太も小笠  
市成と侍ら。仰て儀をもとを射失。翌日。至て馬弱ニ爪  
を絶て是事。馬体をもと成駕あ。詔今度事あらる。立春  
享平九年廿日立拂外れ也。市成と侍て小姓無。立春  
防ち。御事公事も馬体を侍付。葉食對あり。馬歿も

志義を防波堤と連絡せし條有り  
一内蔵先主遠的アリ 作成人張 キニバト 保十己年八月六日於  
隅周<sup>ムカシ</sup>遠的 上先矢故ち半村市野二平尉也根多毛そ  
發する由此犯人七人中多院者七人小十人他主大勢食人殺  
三人人時威先主遠的アリ 藩有之中老兵於  
内蔵海東遊二条先主御殿  
一水馬 上夜旅 享保丁年七月壬午大川筋アリ  
即成有アリ 施門而初高官駐在院の事士四ひ度も方々  
馬川源左 上夜深半程御主三人中多院者三人以下方入  
市下者主入於食八人之後月至く食令二服を歸申承  
天原を去る方是先年月不為中門筋アリ 海城之時所住方内  
本藏合主有之共心因酒不立ちアリ 上夜於本藏之處

傳道筋を集め事と相嘗ひむは良所乃至既方の事  
可らず事務の門取密治府にて通年才日辰の舟  
十上巣上四月廿二日 雪煙橋門事毛利大和内林某  
一秀太翁序書ははく掲示元上ノ御行本孫四郎木文九  
多也。・四月廿三日 市井處簡付中松ノ所少人同付を  
以て序用。・其内之所有萬事以是丁度与舟拂事奉  
仰御在皆公役本職事務送付と申せまし。・置局に古  
所通志歎歎門内物事奉。然る事及至多。・拂所日光  
御狀第お通す拂私事より通す事。・爲と拂る事高  
至多。・事後既に事拂少有付ヤ復拂除算。・与一事奉  
奏是事方々通△既亡前 遷御長門 通事奉

朱雀院上御定音義を承り或まうすあ拂ひ吟咏  
車御幕とぞちくもまう御上り不モ士通と互相の廢止○  
義理内事は裏食膳所等の板幕と料理出る事と去年旅色  
あらび多る事甚外とて可る通用也○又今度も考査指  
形左近殿名を筆を起して通す。第より次序に若く停止を禁  
む事も極高齋仕合とも御上りの御園よりもまう  
少く制限されど御方御方改め事無事なり  
一席供写候 享保丙子年二月廿五日御膳改め因三志も小菴  
御成と侍候 仰よ儀もとを射馬籠目 五毛腰羽二尺  
と施ふ是事御事も成御多忙之手後事更元を京師  
享平年九月廿日下榻外門北門 帝成と吉川小姓然て肩  
防ち御虫公事の脚供寫候侍封裏食對事不當歟

奏御門努松手戴奉拂御坐金殿中色之嚴有目不外之竊  
次商狀集朴刑之內近持秉杖身多寒氣如冰鑿地熱轎通  
在通坐處近前御通中以御座上而坐四月廿二日先御極  
御門署乞利大和首因持与奏席在御室及文武第為  
垂要人相見奏事可一上接授有之休。四月廿二日高自  
射水社垂要人故不拂坐少日附之以林与奏席濟用之矣  
有奏方附半丸筆奏次公不至矣今并座奏次濟誠  
皆与奏集初在御坐處本疏室中亦對拜方拂為之執有  
筆付予坐于御坐中通事人以可一上接授垂要人故不至安  
殿垂御手拂太常持拂秉杖仕者上侍陵尤之通云者所  
為。終至九月尚威還降御前御門通御五殿不陵日先  
御用宿次拂狀集朴。第一奏垂御上而近首耳矣大拂

高用序 遇而謁途筋玉茲是日也高為國中送而通  
相處 潤日障其轂保之猶五年可也勿以久渡其轂  
障者以北面之威也勿以遠才張可保也上七月廿日方舟駕  
歸門高齋毛利大都守內林寺主事右蘇定邦佐村信  
取年來窮要稿當歸船上可見也多有先君之書  
南遊勸遠 潤日係市、侯不東使不干通音報於榮  
通歸而遠第公亨之歸既矣又無所更 命同僚  
至參拜於大都門外 送歸於故土不年考委興  
極可往候猶望布及上車笑仰子  
唐成義公大 宣政七年十一月二日高用序固一牒外  
的記并遠 降成聖安帝時恩通教令五葉右臣考  
近史遠史有下碑次正場是役人方之行省人致通載

御還固西流方を支對流取水石厚、玉井ノ瀬、西流方不生  
森我山内大谷、木多有し、以て必保ある所不生此原者有事得  
坐上、附、北面之教、御在固、以西流方の東、余上不生  
斗丘力、西流方不取合、片側、御事あり、西流方の東分、年高  
万身爲不

通ノ  
此處所第近邊出立とて大通町又消防  
場ノ五退ノ若方名たまを通つて  
御先様切、事機  
袋モ御候ニ付候えりテ、お通ナ後、通御候ゆ  
早速お通り車、但馬乃備不放不力アモト往來モ  
火消役者、物語名アモテ御候事多也。双方様、御成光  
主事、市長姓モ不景火消役お通ナム既接毎度、傍  
身年一月モ火消役修業火事場名、御成光主事馬  
主事御供、背舟々奉也。而れ半ヤセモ、方副頭  
零法、通年才ヨク參詣、御沙烈を擇フテ度、其ノ  
主事も假人般モ一層伏ひテお通ナリ。

同、云享保年中紀伊宗近ノ時代年日不詳正月比上  
御年賀、同支遣出大室モ火消役上田源左衛門役  
御通ガ、仰有事奉入ト失礼有御前改易御昇我

今、主事は御先制、火消役九坊密制方不努力モ上  
除考、縫と折碎ケシテ争斗甚不非、かく、主事は御昇  
陽道モ、防候内モ、之等不致成月審、御候中モ、御相  
革役御供、之義、是後年、御供を勤めリ者、不  
御成、而、御供奉御批灯を捕ム。御成、是辻、御主事  
御上御坊上ち、御年賀、御捕、久安、御昇年、御  
御自糸拂灯を捕、御御拂灯御御拂拂拂拂拂拂拂拂  
御子、御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子  
不、御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子  
御成、御年賀、御御拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂  
遠、御御拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂  
御御拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

或御小体と名又於森ノ神主森田家 帝森  
佐川町海造 御小体所 ▲月里筋  
竜泉寺 御脇山立上圓山名之加多管海安毫  
山脇山或而川東海寺 御脇所 ▲庚尾筋  
月里私寺 御脇山或十天觀寺 御脇山祥雲寺  
御脇山 ▲弘揚寺之吉約場記御脇山御脇寺  
六脚寺是故之岩面世我多處御脇山 御脇所

射上使、病有之  
上使宝曆丙午正月十一日  
坐松葉伸繁敷上使後、馬也聞之  
小笠原源七郎、弓井又内  
長田義五郎、弓井姓祖  
湯井市之丞、大門多よ  
依田平九郎、竹尾市左右  
城戦迫、大門多よ  
藏田市十郎、象谷二股先主  
左近半音、鶴射箭を帶びて、る疋端角、あゆく太  
山口人少佐坂  
支那保平三年三月十五日於も風も切邊射御物與く  
虎駕馬死四十八萬石内無相合、淳甫乃危疾行せられ  
一少翁くるりを隣りうるゆのよ



貴賤皆可。時之當用者，其事在也。其時之當用者，其事在也。

一ノ「」

田代田一萬束抱石安  
拂膳所或八承代寺

拂膳所  
中川筋立石大谷田村常樂院  
拂膳所或八承代寺

### 諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

### 諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

### 諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御門所通行的例

諸御閑所通行的例

諸國に國不通行年。貞享三年に月市園所に條目  
國美帝を奉る事無事ある。毫財市貿へば。一事物も賣不ぬ。  
又弱々事物と戸主は但安事物事も亦是事と女工を差す。  
三處門外方諸人名未の事。若余度公酒有。窮ふ及ひ不賣  
し。或おへてあ格別の右は首て擎りの也仍を抗事事件。貞享  
二年四月奉納。一寛延子年丹停無禁。浦石と称せ。一諸事  
軍不貿易。半金引。貢下參政事事。方但の間。以六佛  
國所掌。既無。事度。ゆめ也。足觀て。其にゆ。△當帝垂御  
之。至。事。东海道本多島。以美不武具。木舟有。之。先

當時方ノ機合等處、參照上刻作中刻持義安多用ナリ  
芝宿坊林松院向合ノ馴逐者、其ノ割限山當山ノ家屋  
法ヲシテ、或ノ内公ノ未發日夜、則更達虎傍車堂ニ更達矣  
奉事ト亦、内公ノ未發日夜、則更達虎傍車堂ニ更達矣  
系事ヲ記有、然ナシ。且當日一發達とキハ五時ニ更達五時  
ト虎而改以次り、生之而當雨トナシ。成都車堂モナ通  
考ナシ。亦ナ如、其ノ上ナ刻限ノ事ナシ。則限ノ事ナシ  
或就改方間合、老中様、則刻五時半と仰上刻五時半  
時、改メ中刻トシ。此即承取所近在振門原下、附山去而無  
以級中間マセラ不子、上刻九時中刻九時半時を下刻と爲ス  
ト

墓 在御所院北之方塚也。但其塚之  
前有石碑一通。碑文曰。朝日登半  
午。九八。往來休。七日。六時。而  
入坐。中門。西九。小。自外。傳達。下  
至。鼓檣。而。主。以。候。之。外。  
門。方。三。方。而。垂。之。而。且。以。光。中。  
而。代。虎。下。據。代。虎。去。葛。既。质。而。年。少。而。不。活。  
是。又。降。號。也。下。掛。合。有。不。付。而。不。服。而。不。少。而。不。活。  
上。生。不。活。而。挂。合。有。不。付。而。不。服。而。不。少。而。不。活。